

だいすき

福井県立三国高等学校

向野 一夏

「ただいまあ、かっちゃんちゃんと勉強してたかあ。」

用事を済ませ帰ってきた母が、そう言いながら二階へ上ってきた。私は、慌てて携帯を横に置き、机の上に閉じてあったノートと教科書を開き、鉛筆を持った。これで大丈夫と思つたのに、戸を開けた母に、妹は駆け寄り言った。

「かっちゃん、携帯ばつかで、何も勉強してなかったよお。」

見る見る怒った顔になった母は、机の上のノートを確認して、携帯を取り上げ降りていった。三時間ほど前から妹は、

「しおり作るう。かわいいの作ってえ。」

そう言つて色画用紙と色鉛筆を持ってきていた。保育園で今、しおり作りが流行っているらしい。でも昨日もその前の日もつきあわされた私は、もう飽きていたし、友達との携帯に夢中で面倒だった。だから妹を放っておいたのだ。きっとそれが妹には腹立たしかったのだろう。私は母を追いかけて謝つたが、携帯は返してもらえなかった。私は頭から湯気がのぼるくらい、妹に腹が立ち、完全に無視をすることに決めた。

その夜から、

「かっちゃん、歯みがきしてえ。」

「かっちゃん、一緒に寝よう。」

「かっちゃん、おやすみ。」

全てに無視を通した。保育園から持ち帰ったはしやコップも、洗うのは私の役割りだったが無視して寝た。次の朝も、

「かっちゃん、おはよう。」

「かっちゃん、ご飯おいしいね。」

「かっちゃん、いってらっしゃーい。」

全て無視した。学校から帰った後も、無視し続けた。昨夜は、無視した私に、

「もう、かっちゃんなんか知らん。」

と言つたけど、背を向けて寝ている私の背中にくっついて寝た妹が、今日は自分から背を向けて寝転がった。

「ズズズーズズズー。」

妹が鼻をすすっていた。

「もしかして泣いてる？やり過ぎたかも。」

そう思ったけど、どうしても後ろを向くことはできなかった。無視を始めて三日目の朝、起きてくると、妹が一生懸命自分の保育園に持っていくはしやコップを洗っていた。背がたりなくて、袖がベタベタになり、コップの中にはまだ泡がついていた。昨日の朝は母が洗っていたから、どうせ今日も母が洗うんだろうと、私は放って寝た。胸の奥の方が何かが刺さったように、チクツとした。学校の用意をして家を出る時、バタバタバタというものすごい足音がした。そしていつもならここで、

「かっちゃん、いってらっしゃーい。」

で、元気いっぱいの声が続く。だけど今日は、足音だけだった。そっと振り返ってみると、妹は黙ってたたずんでいた。

学校から帰ると、テーブルにはオムライスやピザ、グラタン、真ん中にはケーキが並んでいた。今日は六回目の妹の誕生日だ。

「ハッピーバースデイトウユウ、ハッピーバースデイトウユウ、ハッピーバースデイディアひとえ、ハッピーバースデイトウユウ、ひとえ六才おめでとう。」

母と弟が歌い、妹がフーとろうそくの火を消した。母が妹の好きなキャラクターのノートとえんぴつをプレゼントした。弟はお小遣いで買ったメダルをプレゼントした。妹はうれしそうに飛び跳ねて喜んでいった。そして、

「これかっちゃんに、ひとえからプレゼント。」

そう言っ、スーパールの小さな袋をくれた。中を開けると、

「こめんね。」

おつきくて、きつたない字でそう書いてあった。その下には、私らしき女の子と妹らしき女の子の二人の絵が書いてあり、その二人は手を繋いでいた。その周りには、たくさんの赤やピンク、黄色のハートが書かれていた。

「ばっかじゃない、点々ぬけてるし。」

そう言い終わるまでに、土砂降りの雨のように涙が流れた。心臓をギュッとつかまれてるみたいに苦しくて、拭いても拭いても、涙は止まらなかった。その時だ、私の背中を、あったかくてちっちゃな手が摩ってくれた。

「かっちゃん、泣くな。辛いんか？」

と。私の真つ暗だった心は、太陽が上ったように明るくポカポカになった。そして気付いた。無視している間、怒っていたはずの私が、なぜだか淋しかった理由。それは、「かっちゃん」と元気百倍で呼んでくれる妹を、私は好きだったからなんだと。

今、私のポケットには妹への誕生日プレゼントが入っている。涙が止まったら渡そうと思う。学校で一生懸命作った、かっちゃん特製しおり。たくさんの絵と大切な言葉を書いたんだ。

『こめんね、だいすき』と。ひとえが笑ってくれるといいなあ。